

メモ ; 「本文 (黒字ないし赤字) 」は、«2014.07.06. 上原作和 (うへはらさくかず) 氏のウェブサイト「『竹取物語』のページ」からダウンロード». 段替および括弧内訳文 (青字) は勝手な我流解釈。星印メモ (緑字) は雑観。

校訂付記・凡例

本文改訂箇所は赤字として表記する。

仮名遣い・当て字を改めたときも赤色で表記する。

おくりがななどの欠字は〈 〉で補う。

底本の踊り字は用いない。

1999.03.25 校訂 / 2008.09.20 修訂

古本 竹取物語 〈新井信之旧蔵『竹取物語』校訂本文〉

(第一段) かぐや姫の生い立ち

いまはむかし (これは昔の事です) 、*竹取の翁といふものありけり (竹の採取で生計を立てる男をがいました) 。野山なる竹をとりてよろづの事に*つかひけり (その男は野山に自生している竹を刈り取って、色々な道具に加工工作販売していたのです) 。名をば、*さるきのみやつこといひける (名前を猿木美奴といました) 。 *「タケトリノオキナ」は、下に「名をば～」という文があるので、少なくとも個人名ではない。「タケトリ」は竹の伐採・加工に携わる職種名や種族名あたりという説が一般的らしいので、左様に解す。尚、その竹は一定地画で農林管理栽培しているものではなく、野山に自生しているもので、「タケトリ」は野山を歩く貧しい流浪の民だった、という解釈が一般的らしい。一応、従って置く。なお、「オキナ」は普通〈年取った男〉をいうらしいが、「竹取」が一族を示すなら「翁」は〈老人〉というよりは〈当主〉くらいの語用とも思え、此処ではなるべく予断を避けたいので、敢えて漠然と〈男〉として置く。今後の「翁」の言い換えは、場面の設定状況や相手との関係性などから考えて行きたいし、次第に人物像が固まって来たら、改めてこの人の配役意図みたいなものも、見直すことになるだろう。 *「ツカフ」は「使う(消費する)」のではなく、「遣う(役立てる→道具に仕立てる)」のだろう。 *「サルキノミヤツコ」は本文校訂の段階でも諸説の解釈があるという難文らしいが、いずれ個人名では

あるらしいので、それらしく言い換えて置く。

その **竹**の中に、もとひかる竹、**一筋**あり（その伐採する竹林の中に、根元が光る竹が一本ありました）。あやしがりて、よりに見るに、**筒**の中ひかりたり（美奴が不思議がって近寄ってみると筒の中が光っています）。それをみれば、***三寸**ばかりなる人、いとうつくうてあたり（そこを見ると 10cm ほどの小さな人が、とても可愛らしく座っていました）。*「一寸（いっすん）」は約 3 cm ということで、「三寸」は約 9 cm くらいだろうが、この言い回しは厳密な大きさを言い表しているのではなく、日常生活上の分かり易い表現として、凡その大きさを示しているのだろうから、センチメートルを基準単位に用いている現在の日本語では、「約 9 cm」という言い方よりは「約 10cm」と言い表すのが素直な語用だろう。また、「小学館日本古典文学全集の『竹取物語』（片桐洋一 校注・訳）」（以下「全集」と略記。）の解説に「三」という数字が物語成立時の主要概念の一つであるような指摘もあるが、またそれは作者の物語構想を探る視点としては少なからず説得力もあるのだが、そこまで作者の意図を尊重するとなると「三寸」を現在の生活用語に言い換えることは不能と成り、となると、現代語文への言い換え自体も不能と成り、そういう問題は言葉の言い換えにはいつも付いて回るが、此处での「三寸」を言う意図の第一義は、その<小ささ>を示すことにあると決めつけて「10cm」で押し通して置く。

翁いふやう（男がその小人に言うには）、「我あさごとゆふべに、見るだけの中におはするにて**知りぬ**（私が朝に夕に見ている竹の中にいらっしゃるので、分かりました）。*子になり給べき人なんめり（あなたは、籠作りを生業とする私の子にお成りになる運命の人に違いない）」とて、手にいれて（と言って、その子を掌に乗せて連れ帰り）、***妻の女**にあづけて、やしなはず（妻に世話させて育て上げます）。*「コになりたまふべき」の「コ」については「全集」の注に<「コ」は竹取の「籠」と「子」の掛詞>との指摘がある。*「妻の女」は「全集」文では「妻の姫（めのおうな）」となっている。「翁」の対語としては「姫」が妥当ということだろうか。この点については、私は特別な関心が無いので、どうでもいいから先へ進もう、と思うものの、現に違う表記があって、その説明が何だかイヤに分かり難い、というのは、やはり気分が悪い。そも私はたまたま、ウェブ検索でこの古本本文を見つけて、少し読んでみようかと思っただけだが、参照訳文が無いと、とても独自には読み解けないので、本文と訳文が併記されている親切な「全集」を手に入れて、その解説や訳文を参考しながら、勝手な読みに取り掛かったワケで、読み始めてまだ数行目だと言うのに、妙に分かり難い異文に出くわして、意外な深みにさっそくハマった気分だ。何だか面倒に思えて、少し目を逸らしたが、しばらくすると、もう少し調べてみようかという気になった。で、上原作和氏のサイトにある所感文を参考に、「全集」本文は流布本系であり、当本文は新井本と言われる古本系の唯一の完本写本を校訂したものであるらしいことを、改めて認識して、しかし、例えばこ

の「妻の女」にしても、古本写本が漢字表記なのか仮名なのかも、当校訂文では分からず、別の古本本文を参照したいと探したところ、世田谷区の中央図書館に＜南波浩『竹取物語・伊勢物語』（日本古典全書／朝日新聞社・1959）底本・新井本＞（以下「南波校本」と略記。）が所蔵されていると知り、是を借り出して見比べた。と、この「妻の女」は写本では「めのをんな」と平仮名書きされていることが、写本画像からも確認できた。尤も、この「妻の女」についてだけ言えば、これが「妻の姫」であっても、此処までの話の展開からして、私が言い換えようと思うのは＜妻＞という語であることに変わりはないが、此処は私に思い掛けず、変な覚悟をさせた箇所となった。

うつきことかぎりなし（その可愛いことは限りありません）。いと幼なれば、籠にいれてやしなう（とても小さいのでカゴに入れて育てます）。竹取の翁、*なを竹をとるに（この竹取翁は、その後も竹取に励んだが）、この子を見つけてのち、とる竹に、節をへだてて、ことにこかねある竹見つくる事かさなりぬ（この子を見つけてからは、竹の節ごとに黄金が入っている竹を見つけることが度重なりました）。*「なを」は意味不明の不定義語だが、下文にも同様の語用があるので、「なほ（さらに、その後も他に）」の換字と取って置く。

かくて翁、やうやう*ゆるらかになり行く（こうして竹商は次第に余裕がある暮らしになっていきます）。このちごやしなうほとに、すくすくと大きになりまさる（そして、この幼児は世話するほどに、すくすくと大きく育っていきます）。三月ばかりやしなうほどによきほどなる人になりぬれば、*髪上げなど*左右して、髪上げさす（三カ月ばかり育てる内に成人してしまったので、日取りをあれこれ占って、好日に髪結い式を挙げさせます）。*裳きせ、*帳のうちよりもいださず、いつきやしなう（その後は、その人に礼儀正しく着裳させて、他人目を避けて御簾内で大事に育てます）。*「ゆるらか」は＜ゆったりしたさま＞だが、諸本本文では「ゆたか（豊か）」ともあるらしいので、是は＜ゆっくり→余裕＞と拡大解釈して置く。*「かみあげなどさうしてかみあげさす」は「かみあげ」の語用がややこしい。「かみあげ」の語自体は小学館古語辞典に＜女子が成人になったしるしに髪を結い上げる儀式。＞とある。女子の成人式は「裳着・着裳」というのが一般的らしいが、此処ではその成人式を「髪上げ」と言っている、と取って置く。が、だとしても、「などさうして」を挟む前後の「髪上げ」が全く同じ語用とは思えず、同じ「成人式」についての事柄でも、具体的には別の事を指してはいるのだろう。ただ、その内容の解釈は次の「左右して」のノートで改めて考える。ところで、当時の成人式適齢期は12、3歳の初潮期を指すことが多かったようだが、それにしても、わずか三カ月で10cmほどだった小人が成人したというのは、何を意味するのか。とにかく、普通の話ではない。*「左右して」は不明語らしい。「南波校本」によると、写本表記は「さうして」と仮名書きされているようで、同注記には＜「相して（良き日

を選び定めての意) 」>との解釈が示されている。「相す(さうす)」は古語辞典に<相を見て、吉凶判断をする。占う。>とあるので、「髪上げなど」の「など」の列挙意副助詞は<いろいろな見立てをさせる>くらいの言い方になりそうで、となると、この「髪上げ」は<その日取り>のことになりそうだ。が、当本文は「左右して」と校訂されていて、「左右して(さうして)」は<(諸準備を)あれこれ手筈して>という言い方らしい。ということは、「髪上げなど」の「髪上げ」を<日取り>と見るか<諸準備>と見るかの違いになりそうで、何れと判じ難いが、上文から下文への流れが<時間経過>を物語っているようなので、「南波校本」の<日取説>に従って置く。*「裳(も)」は成人女子が腰に纏うヒダのある飾り布で、これも成人式の着裳儀式に用する物であると共に、成人女子の正式装束姿でもある。*「ちやうのうち」は<帳台の内=寝室内>。寝殿で貴族の子女のように育てた、ということだろう。

このちごのかたちの、けうらなる事、世になく、屋のうちはくらきところなく、ひかりみちたり(この稚児の顔立の美しいこと、この世のものとも思われぬほどで、家の中は暗い所が無く、光が満ちていました)。翁の、心ちあしく、くるしき時も、この子を見れば、くるしきこともやみぬ(この養父は体調が悪く辛い時でも、この子を見れば辛さも治まります)。はらだたしきことも、なぐさみけり(不愉快な事態があっても、気分が落ち着きました)。翁、*竹をとる事、*ひさしくなりぬ(そして養父は黄金入りの竹を採ることが、その後はずっと続いたので)、*いきをゐ、*まことの物になりけり(資産勢力が充実して、京都内に御殿を構えたのです)。*「たけをとること」は上文の「この子を見つけて後採る竹に節を隔てて毎に黄金ある竹見つくる」を受けているのだろう。とすれば、その間の文は長めの挿入句なのかもしれない。だとすれば、この文は「三月ばかりやしなうほど」の事柄のまとめとも読めそうだが、貧者が三ヶ月財宝を獲り続けたとしても、一夜にして寝殿が建つとは思えず、旧家を買取るにしても一夜で信用が得られるはずもなく、己れの人品を初め使用人の確保についても、三ヶ月の内では無理が有り過ぎる。いや、そこが変化話の夢物語たる楽しさだとしても、それなら此処までの話が全て三ヶ月以内の出来事だと明示されていれば納得の仕様もあるが、こうした曖昧表現ではモヤモヤが残るばかりで、次項のノートでも同様の疑問が続く。*「ひさしくなりぬ」の文意ははっきりしない。「ひさしい」は<長く時間が経っている>という語用が多いように思うが、此処では幼児が三ヶ月で成人したことから見て、この一文だけを以って、その後に何年も経った後の話というのは考え難い。むしろ、この「ひさしい」は<(それからは)ずっと続いた>という言い方に見えるが、それでも、終わりは無いのか、いつまで続くのか、是は何ヶ月後の話なのか、数年後なのか、という疑問は何も晴らされない。やはり構文を重視して、此処の文を三ヶ月間の出来事のまとめと断定すべきなのだろうか。ただ、そうは云っても、この語り運びから受ける印象としては、「このちごのかたちのけうらなること」以下が稚児が成人後の話に聞こえるので、是が「三月ばかりやしなふほど」の内のことと思うには抵抗感も強い。*「いきをゐ、まことの物になりけり」の文は他写本に「いきほひまうのものになりけり(勢い猛の者に～、威勢を買って富裕の者に～)」と記されている、ということが、例えば「全集」などを参照すれば、

あるらしい。なるほど、「いきをゐ」を「生きを居」と読んでみても意味不明で、是は「勢ひ（いきほひ）」の換字かもしれないが、しかし是が副詞語用かどうかは疑わしい。此処の記文に従えば、この「いきほひ」は文字通り<威勢・勢力>という名詞で、「まことのもの」は<本物＝実質がある＝充実している>と読める。此処までに全く明示はないが、以下の話を無理なく読むには、少なくともこの「まことのものになりけり」で、竹取翁の家は京都内で規模は不明だが寝殿造りに類するような邸宅を構えていた、と読んで置くべきものに思われるので、此処で左様に補語して置く。なお、古文では副詞や接続詞が未発達なものは多く見受けられて文意が分かり難い、ということはよくあることかと思うので、適宜にそれらを補語して言い換えるのは不当ではないと思うが、此処ではそれに加えて、上文の「ひさしくなりぬ」の終止形語用に条件提示法を認めて、其処を文末の句点とせず、当該文を<にて>を含意する理由項と見做して、読点で下文に続ける構文と見る。

この子、いと大きになりぬれば、この子の名を、*みむろのあきたをよびて、つけさす（この子がすっかり大きくなったので、秋の収穫祭に神官に頼んで名付け占いをさせます）。あきた、なよたけのかぐや姫とつけつ（神官は美りの卦で、新竹の香ぐや姫と名付けました）。*この子、一日うちあげうちあげあそぶ（この子を一日中敬い祝って、盛大に祝宴を催します）。よろづのあそびをぞしける（いろいろな舞楽をしました）。おとこは、上下えらはずよびつどへて、いとかしこくあそぶ（姫の存在を広くお披露目するために、婿がねとなるべき男は身分の上下に関わらず招待して、非常に盛大に遊樂します）。*「ミムロノアキタ」の解釈は諸説あるらしい。ただ、多く「ミムロ」は地名ないし部族名、「アキタ」は個人名ないし職種名で、その人物の性格付けは祭司・占い師という説が広く認められているらしい。私も大筋では左様の文意解釈に従いたいが、此処に示されている本文を真じるなら、「ミムロノアキタ」は「御室の秋田」と漢字表記して<神社の稲田に於ける秋の収穫時の穂付き占い（をする神官）>という具体的な記述であるかにも読める。*「コノコヒトヒウチアゲ〜」の文は異文もあるらしいが、此処では当文を真じて読んで置く。「打ち上ぐ」は<高く捧げる→敬い祝う>と<盛大に興じる>との復意語用、と読んで置く。

（第二段） 妻どひ

世界の男の、あてなるも、いやしきも（世の中の男は身分の高い者も低い者も）、「いかでこのかぐや姫を、えてしがな（なんとかしてこのかぐや姫を得たいものだ）」とぞ、音にもききめで（と、その美貌を噂に聞いて）、そのあたりのかきにも、家のとにも（家の周囲の垣根にも、門の外にも）、をる人だに、たやすく見るまじき物を（家人でさえ容易にはかぐや姫に会

えないというのに)、よるはやすくもねず、やみの夜にいでても、あなをくじり、かいばみ、まどひあへり(夜に安眠もできず、闇夜に出掛けてでも、垣根に穴を空けて中を覗いて、うろついでいました)。かかるときよりなむ、*よばひとはいひける(このことがあってから、男の夜歩きを「呼ばい=求婚=夜這い」というようになったのです)。*「ヨバヒトハイヒケル」と講談口調でオチを付ける軽口めいた言い回しは、この物語の特徴の一つであるらしい。尤も、これは物語の成立当初からの構想というよりは、後人の「悪乗り」という見方が一般的とのこと。

人の音もせぬところに、まどひありけども、なにのしるしあるべくもなし(しかし、そのように垣根越しに人気が無い場所をうろついても何の進展があるはずもありません)。家の人どもに(男たちは中の家人に)、「物をだにいはむ(姫に一言だけでも話したい)」とていひかかれど、こととせず(と相談するが、家人は取り合いません)。あたりをはなれぬきみだち(それでも近くを離れぬ貴公子たちで)、夜をあかし、日をくらせる、いとおほかり(夜を明かし、一日中居続ける者がとても多くいました)。をろかなる人は(しかしそのうち、情熱の乏しい者は)、「よなきありきは、よしなかりけり(話が進まない夜歩きでは無駄なだけだ)」とて*こずなりにけり(とあって来なくなりました)。*「来ずなりにけり」について、「全集」の解説によれば、この作者の「三」という数字が構成基盤概念にあるとされる作話姿勢から見て、この<多くの求婚者たち>が去るまでの期間も<三年ぐらいが必要なのではないか>と仮説提示されているが、傍証は無い。だが、もし作者が真に「三」を強調したいのなら、此处でも明示しそうな気はする。というのも、片桐洋一氏自ら指摘されているように<三カ月ほどで成人となって裳着する異常な生育ぶり>と、その後の悠長というか、何も語られていないので平凡であったかに印象する「三年間」とではバランスが悪く、言い出せば、どのようにして香ぐや姫は当時の貴族の所作や教養を身につけたのかななどを初めツッコミどころは数多いが、どうせ「変化物語」なのだから、読者の興味に話を合わせる都合上は、そういう時間経過を進める話運びに、特に問題になる異相性など無い、という作話事情は成立するように私も思う。が、であれば尚更、現に当本文に明示が無い所為で、登場人物の人間関係や子供の成長ぶりが斯くも分かり難いことから、むしろ「三年を経る内に」ぐらいの文があれば、読者に勝手な話の膨らませ方もあるというものだが、実際には経過時間の明示は無いのだから、「たけをとること久しくなりぬ」と共に、この「由なかりけりとて来ずなりにけり」についての具体事情は不明なままだ。

そのなかに、なをいひけるは、色ごのみといはるるかぎり、五人、おもひやむ時なく、よるひるき

けり（その男たちの中で、尚も求婚し続けていたのは、女好きとして有名な者ばかりの五人で、諦めること無く、昼夜を問わず通って来ました）。*その名どもは、いしつくりの御こ、くらもりの御こ、右大臣あへのみあらじ、大納言おほとものみゆき、中納言いその神のまろたふ、この人たちなりけり（その人々の名は、石造りの皇子、倉守りの皇子、右大臣安倍の御主人、大納言大伴の御行、中納言石上の麿足、と正にその色好みに当たる、この人たちなのでした）。*「その名どもは～」については、「全集」の解説によれば「いしつくりのみこ」と「くらもちのみこ」はそれぞれ話の内容を表した命名らしく、物語の構想当初ないし成立初期からのもので、他の作意はないとされ、後の三人については後世の加筆者がその当時の興味を誘う作意を以って、実在の人物に似せた戯画として示した登場人物、とされるようだ。これからこの物語を読み進む私としては、今現在ではこの解説の正否を判断する素養は無いが、この「古本竹取物語 <新井信之 旧蔵>」本文が何の手掛かりも無しに読み進むのは不可能に見える難解な古文なので、ともかくも手掛かりの一つとして、一応はこの「全集」の解説の立場に従って、登場人物の輪郭を捉えて置きたい。で、残りの三人についてだが、彼等の投影対象は<壬申の乱（672年）における天武天皇方の忠臣だった実在人物>であるらしく、物語の中期成立時であろう平安初期に追加された登場人物だろうとのように解説されている。是に従えば、「うだいじんあへのみあらじ」は安倍御主人（あべのみうし）、「だいなごんおほとものみゆき」は大伴御行（おおとものみゆき）、「ちゅうなごんいそのかみのまろたふ」は石上麿足（いそのかみのまろたり）、ということになるらしい。なお、当本文には「いそのかみのまろたふ」とあるが、「全集」などの流布本本文には「いそのかみのまろたり」とあるようで、当本文でも後文に「いそのかみまろたり」とあるので、「たふ」は単純な誤写と取って置く。と言ってはみたものの、此処で早々に誤写があるとしたら、先が思い遣られて、実は気が重い。というのも、「全集」解説に<現存の古本系の本文ははなはだしく乱れている。またその乱れを訂正するための改竄の手もかなり加わっている。>とあり、古本系は恣意的に都合良く整理されているようで信じ難いとされ、むしろ不合理な文のまま伝わっている<流布本を底本とした>と述べられているので、是が誤写だとしたら、これからこの古本本文を読むとする私の気負いに、いくぶんと水を挿される感が否めないからだ。ただ、竹取物語は、平安中期の作とされる「源氏物語」の本文に、かぐや姫の話という内容の絵物語として「物語の出で来はじめの祖」と語られていて、その成立は平安初期以前と目されるものの、同解説に<現『竹取物語』のもっとも古い伝写本といえども、室町時代をさかのぼりうるものではなく> <古い写本がない。>とあり、さらに<どうせたいした本文はないのだからとわり切って、眼前の本文を徹底的に読み解くみずからの能力をみがくことのほうがより肝要だともいえる>とまであるので、せっかく新井信之氏旧蔵の古本本文をコピーしたことはあるし、手元に「全集」もあって流布本本文も参照できることだし、私は基本的に先ずは当古本本文を真として、その読解を試みる心算ではいる。

世中におほかる人をだに（この人たちは、世の中に多く居る程度の女でも）、すこしもかた

ちよしとききて、見まほしくする人どもなりければ（少しでも美人と聞けば、困って世話したくなる人たちだったので）、かぐや姫をえまほしくて、物もくはずして、おもひつつかの家にゆきて、たたずみありけどかいあるべくもあらず（かぐや姫を嫁にしたいくて、物も食わず熱を上げては竹取の家に行つてうろつき回るが、何の進展のあるはずもありません）。ふみをかきてやれども、返事もせず（手紙を書き送っても姫は返事もしません）。

わびうたなどかきをこすれど（返事が無いのは情けないと愚痴る歌を書いて送っても）、「かひなし」とおもへど（どうせ無駄だと思うものの）、しも月しはすのふりこほり（十一月、十二月の雪降りや道が凍りつく中も）、みな月のてりはたたくにも（六月のカンカン照りや入道雲が沸いて雷鳴轟く中も）、さはらずきけり（構わず手紙を送って来ました）。

この人びと、*ある時は、竹取のよびいでて（この人たちは自身が在来した時は竹取翁を呼び出して）、「みむすめをくれ給へ」とふしおがみ、てをとりてのたまへど（「娘さんをください」と平伏して手を取り仰るが）、「をのがなさぬ子なれば、心にもしたかはず（実の子ではないので、思うようになりません）」などいひて、月ひをすごす（などと養父は言って、月日を遣り過ぎます）。かかれば（そういうことなので）、この人びと、家にかへりて、*ものをおもひ、いのりをし、願をたてすれども、おもひやむべくもあらず（この人びとは家に帰って、無理なものかと考え直し、神仏のお告げを聞き直し、未練を断つべく念仏行に籠もるが、姫への恋情は止むはずもありません）。*「あるときは」の「あり」は「在り（実際に居る）」で、上文の手紙を遣る話に対して、此処では本人が実際に出向いた時のことを述べている、のだろう。*「ものをおもふ」は「物思いに悩む」という言い方の場合もあるだろうが、此処では「かかれば」という接続句で上文を条件項として受けている構文なので、この「もの」は「こころにもしたかはず」という姫の状態を指し、その事態から男たちが当該事項を「おもふ」=再考する」という文意に取って置く。また、以下の「いのり（神仏に相談する）」や「ぐわんをたつ（願掛け修行する）」も同様の文脈で読む。

かくおもひいふ事やまず（こうして求婚は止むこと無く）、「さりとも、つゐにおとこあらせざらむやは（いくら頑なに男を避けていても、生涯独身ということはないだろう）」とおもひて、たのみ

をかけた（と、思って、この人たちは期待したのです）。あながちに、心ざしを見らんとす（そして、何とか好意を示しそうとします）。これを見つみて、翁、かぐや姫にいふやう（これを見重ねて、養父がかぐや姫に云うには）、

「我この佛、へんげの人と申なから（私はあなたを、尊い神仏が仮に人の姿になっている人とは申し敬いながらも）、ここらおおきさまで、なでおほしやしなひたてまつりつ（このような大きさになるまで、可愛がり育ててお世話申し上げてきました）。心ざしおろかならずは（私の愛情は深いのですから）、翁の申さむ事は、きき給くひてむや（この養父の申し上げることは、お聞きくださるでしょうか）」といへば（と美奴が云うと）、

「なに事をかは（何があるでしょうか）、の給くはむことは、うけ給はらざらむ（あなた様が仰ることを、私が承らないことなど）。変化の物にて侍けむ身をもしらず（仮の姿でいるという我が身も顧みず）、おやとこそ、おもひたてまつれ（あなた様を親とお思い申していますので）」といふ（とかぐや姫は言います）。

翁（養父は）、「うれしくも、のたまふ物かな（嬉しいことを仰ってくださるものだ）。翁、*とし七十にあまりぬ（しかし、私は70歳を過ぎています）。けふあすともしらず（今日明日とも知れない命ですので、今後の事が心配です）。この世の人は、女は男にあふことをす（この世の人は、女は男と結び合うものです）。そののち、門ひろくもなり侍る（そうして子を設けて、一門は栄えます）。いかでか、さてことなくてはおはせむ（どうしてあなたは、そういうことなしに、この先いらっしやれましょうか）」 *「とし七十にあまりぬ」は後文に、この数年後の竹取翁の弁として

「翁、今年五十ばかりなりけれども」とあることから、大きな矛盾点として広く指摘されている箇所らしい。そして当然ながら、美奴の現在年齢を推量する手掛かりなど、私には何も無い。大体、この話の今現在が、美奴が竹藪でかぐや姫を見つけてから、どれほど後の事なのかさえははっきりしない。ただ、第一線の竹採事業者たる美奴が、今日の電化生活ならぬ昔のことなら、70歳近くでは高齢に過ぎるような気はする。が、いかにも分からない。だから確かに、厳密な年齢となると不明なのかもしれないが、此处での要点は「けふあすともしらず（身にて、後の世心許なし）」というこの美奴の説得を以下の姫の発言を引き出す条件提示にしている、という論理構成の物語展開なので、その文脈だけは此处で拾って置かないと話の腰が折れてしまう。その点だけは心して補語して置きたい。だからこそ、このような非常に重要な

場面で問題点があるのは大いに惜しまれるところだ。

かぐや姫いはく（かぐや姫の言い分に）、「なんでう、さる事かし侍るべき（どうして、そんなことをしなければならぬのでしょうか）」といへば（と言え）、「**変化**の人といふとも、*女の身をもて（尊者の仮の姿とは言え、女の身である以上は、子を設けるが幸せなのだから）、**翁**のあらむかぎりは、かくてもいますらむかし（私が生きている内は、このまま独身でいらっしやるとしても、いつまでもそのままというわけにもいかない）、この人々の、とし月をへて、かくのみいまして、の給ふことを（せつかく、この人たちが何年もこのように一途にお見えになり続けて、求婚なさっているのだから）、おもひさだめて、あひ給くひね（よくよく何方かを選び定めて、結婚なさいませ）」といへば（と美奴が云え）、*「**をんなのみをもて**」は「おもひさだめて」に繋がないと全体の文意が取れない。で、「へんげのひとといふとも」の「も」の逆接助詞は、「女の身をもて」には<子を設くべし>、「かくてもいますらむかし」には<なほ>を、それぞれ下に含意させるものとして、左様明示補語する。

かぐや姫いはく（かぐや姫の言い分は）、「よくもあらぬかたちを（美人でもない私ですの）、ふかき心ざしをしらず（相手の方の深い愛情が信じられません）。あだ心つきなば、のちくやしき事もあるべきを（浮気をされたら、後で口惜しい思いをするだろうから）、とおもふばかりなり（と思うばかりです）。世のかしこき人なりとも、ふかき心ざしをしらず、あひがたしとなむおもふ（世間の評判が良い人であっても、深い愛情を確かめないでは、結婚は出来ない）のように思うのです）」といふ（と言います）。

翁いはく（養父が云うことには）、「おもひのごとくもの給かな（あなたは、私の考えと同じように仰るものですね）。**そもそも**（しかし、いったい）、いかやうなる心ざしに、あひ給はむとおぼすらむ（どういふ愛情の持ち主に、結婚なさろうとお考えですか）。心ざしおろかならぬ人々にこそあむめれ（この方々はみな、愛情が浅くない人びとのようですが）」

かぐや姫のいはく（かぐや姫の言い分は）、「なにばかりの心ざしをみむとか（何もそんな大仰に愛情を確かめようというのでもありません）、いささかなる事なり（ちょっとしたことです）。人のみこころざしは、ひとしかかなり（五人の方の御愛情は等しく見えます）。いかでか、これ

が中に、おとりまさりはしらむ（何とかこの中でその優劣を知りたいのです）。

『五人のひとの中に、ゆかしき物を見せ給はむに、御心ざしまさりたり、とて、つかうまつらむ（五人の中で、私が見たいものを見せてくださる方に、御愛情が深いと思って、お仕えいたします）』と、そのおはすらむ人に、申くし給へ（と、その求婚にお見えになるという方々に申し上げてください）」といふ（と言います）。「よき事なり」とうけつ（「それは好い方法だ」と養父は引き受けました）。

やうやう、日くるるほどに、れいのごとく、きあつまりぬ（次第に日が暮れるに従って、いつものように、五人の貴公子たちは集まってきました）。あるいはふゑをふき、あるいはうたをうたひ、あるいはしゃうがをし、あふぎをうちならしなどするに、翁いでていはく（ある者は笛を吹き、ある者は謡曲を歌い、ある者は舞曲の節回しをして、扇子で拍子を打ち鳴らしたりして浮かれているところに、養父が出てきて言うことに）、

「かたじけなく、きたなき所にとし月をへて物し給くふ（畏れ多くも、このような卑しい所へ何年にも渡ってお出でいただきまして）」きはまりてかしこまり申くす（と非常に恐縮して貴公子たちに申し上げます）。

「『翁、いのち、けふあすしらぬを（高齡であるこの私の命が今日明日と知れぬのだから、今後は）、かくの給ふ君たちにも、よくおもひさだめて、つかうまつれ（こうして求婚なさる貴公子たちにも、よく選び定めて、何方かにお仕え申しなさい）』と申くすも（と私が姫に申したものの）、

『ことわりなり（ごもつともです）。いづれも、おとりまさるおはしまさねば、さだめがたし（しかし何方も優劣が無くいらっしゃるので、選べません）。ゆかしくおもひ侍るもの侍くるを（私には見てみたいと思っている物がございますので）、見せ給はむに御心ざしのほどは見ゆべし（それをお見せくださる方に御愛情の深さがあると分かるでしょう）、つかうまつらむ事は、それになむさだむべき（お相手は、そのことで選べます）』といへば（と姫が私に云うので）、『こ

れ、よきことなり（それは良い方法だ）。人の御うらみ事、あるまじ（それなら他の人からの御恨みを買うこともないでしょう）』といふ（という次第になった経緯を言います）。

五人の人々も、「よき事なり」といへば（五人の人々も「それは良い方法だ」と云うので）、翁いりて、かぐや姫にいはいく（養父は奥へ入って、かぐや姫に貴人たちの了解を得たことを説明します）。

〈かぐや姫〉（かぐや姫が云うことには）、「石つくりのみこには、ほとけの御石のはちといふ物あり。それをとりて給へ（石作皇子には、お釈迦様が使った尊石で作った鉢という物があります。それを持って来てください）。くらもちの御子には、ひんがしのうみに、ほうらいといふ山あなり（倉持皇子には、東の海の先に蓬莱という山があるそうで）、そこに、しろがねをねとし、こがねをくきとして、しろきたまをみとしたる木あり（其処に白金を根とし、黄金を茎として、真珠を実とした木があります）。それひとえだ、おりて給はらむ（それを一枝折って持って来てください）。

いまひとりにはもろこしにあむなる、ひねずみのかわぎぬを給へ（もう一人には唐国にあるという、火鼠の皮衣をお願いします）。おおともの大納言には、たつのくびに、五いろにひかるたまあむなり。それとりて給へ（大伴大納言には、龍の首に五色に光る玉があるそうで、それを取って来てください）。いそのかみの中納言には、つばくらめのもたるこやすがい、ひとつとりてたまへ（石上中納言には、燕が持つという子安貝をひとつ取って来てください）」といふ（と言います）。「いまひとりには」という言い方については、全集の解説に〈古い形の物語の名残〉とあり、であれば旧本は「ひねずみのかはぎぬをたまへ」で文落している、「おほとものだいなごん」以下は新本での付足ということになりそう。確かに、是は変な言い回しで付足説は説得力があるが、だとしても、「いまひとりには」は前二者に対して余り素っ気ない言い方に見えるので、「古い形の物語」が前二者に対しても個人名を挙げない簡素な語りだとしたら、何故此処だけに「古い形」が残っているのは、やはり疑問だ。仮に、何段階かの変更が施されて、何処かの時点で下文が付足されたとしても、何故その時に此処の文を修辭し直さなかったのだろう。修正者に妙な律儀があって、面白がって加筆はしたものの、原型保持には留意した、ということなのだろうか。何とも言い切れないが、とにかく是は変な印象のある文ではある。

翁（養父は）、「かたき事どもにこそあむなれ（どれも手に入れるのが難しいものようだ）。このくににある物にもあらず（この国にある物でもない）。かくかたき事をば、いかで申さむ（このような難題を、どうして貴人たちに申せましょう）」といふ（と姫に言います）。

かぐや姫ののたまはく（かぐや姫が仰るには）、「なにか、かたからむ」といへば（「何も難しくありません」と云うので）、翁（養父は）、「ともあれかくもあれ、申さむ」とていでて（「とにかく申し上げてみましょう」と表座敷に出て来て）、「かくなむ、この物をなむ、きこゆるやうに、見せ給へ」といへば（「このように、この品々を、娘が申しているように、お見せください」と云えば）、みこたち、かんだちめききて（皇子たちと中枢権力者たちは聞いて）、「おいらかに、『このあたりよりありきそ（姫は普通に、「近くをうろつくな）』とやはのたまはぬ（とは仰らないのか）」といひて、からうしてみなかへりぬ（と言って、難題に頭を抱えて皆帰りました）。

（第三段） 仏の御石の鉢

なをこの女見では（それでも尚、この女と結婚せずには）、よにあるまじき、心ちどもなむしければ（生きていられない、という気持のする貴公子たちだったので）、「てんぢくにある物ももてこぬ物かは」とおもひめぐらして（「遠国のインドにある物でも持って来ないで居られようか」と思案したが）、いしつくりの御こは、心のしたくある人にて（石作皇子は機転の利く人だったので）、「てんぢくに、ふたつとなきはちをば、八千里のほどゆきたりとも、いかでか、とるべき」とおもひて（「インドに二つと無い鉢を八千里の遠くまで尋ねても、どうして手に入れられようか」と思って）、かぐや姫のもとには、「いまなむ、てんぢくへ、いしのはちとりにまかる」ときかせて、*三年ばかり（かぐや姫の許には、「今からインドへ石の鉢を取りに出掛けます」と知らせてから、三年ほどして）、やまとのくに、*とをちのこほりにある山寺に（大和国十市郡にある山寺に祀られている）、*びんづるのまへなるはちの、ひたぐろに*へすみつきたるをとりて（ビンヅル尊者像の前にある食事鉢の真っ黒にお香の煤墨が染み付いたものを取って）、にしきのふくろにいれて、つくり花のえだにつけて（錦の袋に入れて、飾りの造花の枝に付けて）、かぐや

姫の家に、もてきて見せければ（かぐや姫の家に持って来て見せると）、はちのうへにも文ぐしたり（鉢の上にも手紙が載せてありました）。*「さんねんばかり」は下に<後に>が省かれた舌足らずな言い方だが、此処に「三年」と期間設定の明示があるのは作者の物語構想を考察する上で、とても意義深そうに見える。*「とをちのこほり」は「大和国十市郡」と全集の注にある。昔の地名だが、今で言えば香久山のある奈良県橿原市あたりのことらしい。*「びんづる」は goo 辞書「デジタル大辞泉」に<【賓頭盧】《(梵)Piṇḍola-bhāradvājaの音写から。不動の意》十六羅漢の第一。白頭・長眉の相を備える阿羅漢。神通に達したが、みだりに用いて仏陀(ぶつだ)にしかられ、仏陀滅後の衆生の教化を命じられた。中国では像を食堂(じきどう)に安置して祭った。日本ではこの像をなでると病気が治るとされ、なで仏の風習が広がった。おびんずる。>とある。さっぱり分からないが、救いを求める人びとに敬意と親しみを以って迎えられた尊者像のこと、ではあるらしい。なお、古代語の音写なら、漢字表記に本義はなさそうだから、分かり易くカタカナ表記する。*「へすみ」は<スス>と南波校本にある。

ひろげてみれば、かくなり（姫がその手紙を広げてみると、このような和歌が書かれていました）。

（和歌 01、古本版の当本文）「うみやまの みちにこころは つくしてき ないしのはちの なみだながれき」

（和歌 01、「日本古典文学全集」にある流布本版の参照引用文）「*海山の道に心は 尽くし果て、泣い死のは血の涙流れき」*「全集」の注に、この歌は<物名歌（ぶつめいか）である。「筑紫」「石の鉢」「血の涙」など詠み込む。「筑紫を出発してから海山の道の苦しさに、心を尽くし果て、果ての無い旅で、泣いて、石のハチを取るために血の涙を流した」と、掛詞をふんだんに用いている。なお「ないしの鉢」を「みいしの鉢」の誤写とする説もある。>とある。私の気になる点は、まず一つに、古本版は三節が「つくしはて」ではなく「つくしてき」と書かれていること。また今一つに、此処には敢えて注に習った漢字表記を試みたが、「ないしのはちの」を「無い、泣い死のは血の」と読むのは、読者各位の個人趣味に頼り過ぎる詠み筋との嫌いを感じる。以上から、私が素直に読める掛詞は、一つが「（道に心は）尽くし」と「筑紫」、もう一つが「石の鉢」と「血の涙」、の二箇所だ。なので、私としては「ないし」よりは「みいし」説に、そうであって欲しいと心引かれる。

（換歌 01、我流解釈による意識文）「身を尽くし 御石の鉢を見出して」

かぐや姫、「*光やある」と、とばかりみるに（かぐや姫は「仏の御石は宝石に違いないので、必ず光るはずだ」と確かめてみると）、ほたるばかりのひかりだになし（その石鉢は蛍ほどの淡い光りさえありません）。*「ひかりやある」は文意不明だ。「全集」の注には<本物の石の鉢ならば光を発して

いるはずであった。しかし、文中にはその説明がない。この話は他の四話にくらべて説明不足なのである。>とある。何ということか。このツメの段に至って、オチを着ける為の前フリが無いという不手際は取り返しが尽かない。しかし、そんな拙い文章構成のまま写本が引き継がれてきたということはどういうことなのだろう。写本が基本的に仏教寺院で行われ、仏僧たちにとっては「仏の御石の鉢」が<光る物>であることが常識だった、とでも考えるべきなのだろうか。実際、「全集」注にも<江戸時代中期の真言僧で国学者でもあったらしい契沖（けいちゅう）がその著書で、『西遊記』の玄奘法師がペルシャの王宮で釈迦仏の鉢を見たことや、その鉢の由来の古記事などを指摘している>といったような指摘があったり、それらの著書の引用文照会もされていたりする。が、人を出し抜こうとした「こころのしたくある」石作皇子が山寺の僧侶に相談もせずピンヅル像の石鉢を持ち出した、という浅慮を、物語を写本する学僧が冷笑していた、という姿勢は出し抜きの上塗りや暗意を暗意して醜悪だ。仏僧の姿勢として、どうも釈然としない。だから、この事情はもっと広く薄い読者層に於いて何らかの予断があった、と考える。と、私や注釈者のようにこの「光やある」を<文意不明>とは思わない多くの読者たち、それは大衆とまでは云えないが、ざっと善男善女と目される広義の仏教徒あたりを想定すれば、彼等にとって「ほとけのみし」は当然に<尊石>なのであって、「尊石」とは即ち<宝石>なのであって、「宝石」であってみれば当然に<光るものだ>という認識が疑いもなく受け取れた、のだろう。だから、このツメの段に至って不可解な話になったのではなくて、石作皇子が「ひたぐろにへすみつきたる」石鉢を持ち出した時点で、その不可解な行動を唾然として読んでいた、というのが、かつての多くの読者姿勢だったのだろう。それが分からない私や「こころのしたくある」石作皇子は、彼等から見れば冷笑すべき者なのではなく、軽蔑すべき無信仰者なのである。彼等は特に熱心な信者でもなく、まして狂信者などでもない、ごく普通の人びとで、そういう仏心篤い国情が永く続いた環境下で、この物語が語り継がれてきた、という見方が最も不自然さが少ないのかもしれない。いやしかし、そういうことになると、「三」という数字の抽象概念を多くの読者が予断として持っていた、という可能性も大きくなる。となると、この物語の作意発想を探る点に於いて、「三」に込められた作者の概念規定や読者の了解事項の内容は大いに留意すべき要素なのかもしれない。にしても、現に私が其処から外れているように、今の多くの読者にとっては、この本文描写は非常に難解だ。だから、少し強引に補語して、文中説明のある言い換え文を試みる。

（和歌 02）「おく露の ひかりをただぞ やどさまし おぐら山まで なにたづねけむ」

（和歌 02、「全集」流布本版）「*置く露の光をだにも宿さまし、小倉の山にて何求めけむ」 *「全集」の注に、この歌は<「置く露の光」は、置いた露が反射する光。「やどさまし」の「まし」は事実と反する仮想を表わす。「小倉の山」は『万葉集』にも詠まれている大和の山。ふつう『大和志』（十市郡）の「倉橋山。倉橋村の上。峰の名小倉」という記事によって、多武峰村（とうのみねむら）大字倉橋の上方の峰のこととする。「小暗し（をぐらし）」を掛けた歌枕的表現である。この話にかぎって、かぐや姫が皇子の行動を見通しているというのも変なことであって、構成上の素朴さを露出している。>とある。先ず古本版との違いは、二節が「ひかりをただぞ」と「ひかりをだに

も」、四節が「おぐらやままで」と「をぐらのやまにて」、五節が「なにとつねけむ」と「なにもとめけむ」。ただ、これらの語用違いに歌意の相違は生じないように、両者は同様の歌筋に見做せるだろう。「置く露」は、空気中の気体水分が低温物質に触れて飽和し、その表面に液体凝固したもので、結露だ。「やどす（宿す）」は＜許容する、保持する、孕む＞などで、此处では＜保持する→備えている＞という語用。「やどさまし」は＜在ったら良かったのに＞。「小倉山」は、かぐや姫が是を＜倉橋山＞と特定した歌詠みなら、確かに「全集」注が指摘するように不自然なネタバレだが、むしろ歌意は石鉢の「暗し」にあったとすれば、その素直な歌詠みが石作皇子の策略を、図らずも結果として暴いてしまった、という作文意図として受け取ることも出来るのではないか。「山」は地形を指すこともあるが、何かの＜大きなモノ＞を指す言い方でもあり、成果を期待した＜賭け・策略＞でもあるので、かぐや姫はこの歌で＜石作皇子の失敗した石鉢探し＞そのものを評した、と見るべきかも知れない。むしろ、多くの読者がそう受け止めたからこそ、面白がって語り継いだ、と見做したい。でないと、この物語が素朴な構成であることの露呈以前に、話自体があまりにも分かり難いものになってしまう。もう少し言えば、このかぐや姫の返歌が結果として示した「小倉山」の地名で、石作皇子は策略の実態を見破られてしまったので、下文にあるように「はちをかどにすてて」言い訳せざるを得なくなった、という話運びとして読まないと、かくも長きに語り継がれるべき面白い物語にならない。だから、現代文で普通にそう読めるように補語を工夫するのが、この物語を子供に語り継ぐべき大人の責務なのではないか。

（換歌 02）「光らない この石鉢は 小暗やマア」

とて返していだす（と返歌を添えて、かぐや姫はこの石鉢を石作皇子に返して、追い出します）。はちをかどにすてて（帰り際にこの石鉢を門の外に投げ捨てて）、この御こ、うたのかへしをす（石鉢の暗さから小椋山での画策を見破られてしまった石作皇子は、さらに返歌を詠みます）。

（和歌 03）「しら山に あへばひかりの うするかと はちをすてても なげかるかな」

（和歌 03、「全集」流布本版）「*白山に会へば光の失するかと、鉢を捨てても頼まれるかな」 *「全集」の注に、この歌は＜「白山」は「小倉（暗）山」に対して言った。「はち」は「鉢」と「恥」を掛ける。＞とある。この注では、「小倉山」の地名属性よりも＜（鉢の）暗さ＞がかぐや姫の返歌の主題だったと指摘している、ようだ。そして大体の歌筋について、「全集」の訳文は＜光っている鉢を持って来たのですが、白山のように光り輝く美女にあつたので、押し消され光が失せているだけで、ほんとうは光る鉢ではなかったかと、鉢を捨ててしまっても、恥を捨ててあつかましく期待されるのですよ＞と示されている。この訳文は意味を分かり易く示すためのものだろうから、ケチを着けるような物言いはしたくないが、「光っている鉢を持って来た」という言い方で、石作皇子が御鉢の宝石属性を認

識していたとする解釈には同意できない。皇子が事前に左様な認識を持っていたなら、絶対に「ひたぐろにへすみつきたる」石鉢など持参しない。三年掛かりで自ら道化を買って出る行動に説得力は無いし、何よりも左様な立場は私の解釈に本質的に反する。また、結びに「あつかましく期待される」とあるのも、五節に於いて流布本版が「嘆かるる」ではなく「頼まれる」と詠まれていることに依るようだが、この「頼まれる」は<期待される>ではなく<頼りたい=縋りたい>という言い方だ。「頼まれる」は<他動詞「頼む（頼る、援助を期待する）」の未然形「頼ま」+自発ないし受身を示す助動詞「る」の連用形「れ」+状態を示す助動詞「り」の連体形「る」>で構成された語で、肝は助動詞「る」が受身意ではなく自発意で、全体で<思わず頼る状態になってしまう→頼らざるを得ない→（あなたの好意に）すがりたい>という言い方になっている、ということだ。この「頼まれる」は「嘆かるる」以上に強く受容を訴えているが、今さらに「ほんとうは光る鉢ではなかったかと～あつかましく期待される」という事前宝石認識論（を装う立場）とは違って、この言い方では<皇子が事前に御鉢の宝石属性を認知していなかったと理解する立場を犯すものではない>ということが重要だ。即ち、石作皇子は持参した石鉢が偽物とバレたので投げ捨てたが、かぐや姫こそが宝石なのだから、何を持ってきてもそれ以上に光る物など無い、と嘆いては、合わねば、この歌をベンチャラと聞き留めて努力を認めてほしいと伝言を頼んだ、とのように理解したい。だがしかし、此处に至って符と気づく。石作皇子は、初めから此处までのことを計算づくで、即ち、最初からかぐや姫の注文を実現不可能な無理難題と判断した上で、バレることを承知の上で偽物を持参し、バレた以上は鉢を投げ捨てて割ってから、この歌を詠んで姫の同情を買う、という作戦であり、そういう意味で「こころのしたくあるひと」と作者は前フリしていた、ということなのかもしれない。いや、そうだろう。辻褄は合う。ただし、それはこの物語が仏心に篤い国情に於いて語り継がれてきたことを前提にするものだが、現在でも広く寺社が残っていることからしても、仏心が失われたのは明治政府が神道で国をまとめるべく仏道を排除した以降の、そしてまた、特に近年の産業構成分布の急激な変化によって農耕社会の共同体組織が瓦解した、このほんの数十年間でのことであろうとは推察に難くないので、この前提に立つ基本認識は大きな誤りではないだろう。だから、仏心ある時代に生きていたであろう石作皇子は、常識を知らない私などとは違って、やはり石鉢の宝石属性を事前に知っていたのだ。その上で、ワザと道化を装って、間抜け者が「ひたぐろにへすみつきたる」石鉢を持参した体を演じて見せた。多くの読者は、私を含めてマンマと一杯食わされて、皇子を冷笑していたが、此处に来てドンデン返しを喰らう羽目となり、それこそがこの話の面白さとして味わうべき所ということになる。となると、この物語を今後も引き継ぐべき現代語の話にするには、御鉢の宝石属性は当初から読者に明示して、しかし石作皇子には、その属性に気付いていないまま黒い石鉢を持参するという道化を演じさせて、このツメの段になって、実は皇子は初めから宝石属性を承知の上で、ワザと失敗して姫の同情を買う作戦だった、と普通に読み進める作文を工夫しなければならない、ということになりそうだ。しかし、私は今はそれを試みない。此处では考察に止めて置く。また、それでも結局、皇子は姫の歓心を買うことは出来ずに、作戦自体も失敗して、失敗は装うだけに止まらず本当に完敗した、というオチにまで上手く繋げなければならない。それらの作業をこの古本では、それもこの説話に関しては非常に簡潔な短篇で、その成立時代での有効性に於いてだが、成功させているかに見える。何処が素朴な構成であるものか。何とも手の込んだ仕掛けで、舌を巻く。

(換歌 03) 「あなたほど 光らないから 捨てた鉢」

とよみて入(れ)たり (石作皇子はこう詠んで色紙をかぐや姫の部屋に入れました) 。かぐや姫、返しせずなりぬ (かぐや姫は返歌もしなくなっていました) 。*みみにもきき入(れ)ざりければ (姫は皇子の様子を養父から聞こうとしなかったので) 、いひわづらひてかへりぬ (せっかく仕組んだ芝居も通じないかと、皇子は愚痴をこぼして帰りました) 。*かのはちをすて、またいひけるをききてぞ (持参した鉢を捨てて、その上でなお食い下がるという皇子の言い草を、かぐや姫が聞いて呆れたことから) 、おもひなげきをば、「はちをすつ」といひける (体面も無しに泣き悲しむことを「恥を捨てる」と言ったのです) 。 *「耳にも聞き入れざりければ」の目的語は何か? 文中には明示が無いので、文脈から読み取る他は無い。にしても、古文にはこの手の、不当とも思えるほどの分かり難い省略が多い。主語は勿論、目的語の省略も多いし、場合によっては述語も曖昧どころか、記述が無い。尤も、実は日常会話では、是らの省略はむしろ普通だ。それは会話参加者同士に於いて場の共有が前提となっているので、話の主題や要点が自明であり、余計な言葉を弄すると、却って対象が一般化または客体化されて論点が紛らわしくなる嫌いがあるからだろうが、同様の作用が古文作者の狭い世界観の一方的な思い込みによって書式化されているのかもしれない。だとしたら、読者は作者のつもりになって、少し前から遡って読み直す作業に迫られることになる。で、結論としては、此処では石作皇子の作戦が直前に示されているので、その芝居を打っている皇子の様子が目的語で、それを姫に伝えるのは恐らくは翁なのだろう。詰まりは、皇子の計略は此処に敢えなく全滅した、ということになりそうだ。 *「かのはち」は「鉢」だけを指すのではなく、「鉢を捨てまた言ひける」という石作皇子の作戦全体を指しているのだろう。その皮肉口調が、この講談のオチを効果的に印象づけている。

(第四段) 蓬萊の玉の枝

くらもりの御子は、*こころたばかりある人にて (倉護皇子は腹黒い人だったので) 、おほやけには、「つくしのくにに、*ゆあみにまからむ」といとも申し(し)て (帝には「筑紫の国に湯治に出掛けます」と休暇願いを出して) 、かぐや姫には、「たまのえだとりまかる」といはせてくだり給は(む)に (かぐや姫には「蓬萊の玉の枝を取りに出掛けます」と使者に言わせて都から下りなされるので) 、つかうまつるべき人は、みななにはまで、御おくりしけり (奉公人たちはみな難波の湊までお見送り申しました) 。 *「こころたばかりある人」と「こころのしたくある人」とは何がどう違うのか。「たばかり」も「したく」も事前に準備する<計略、策略>ではあるが、「したく」が正攻法の<作戦>であることに対して、「た

ばかり」は虚偽や錯誤という下品な手段を弄してまでも相手を騙して実利を狙う〈謀略〉を言う。しかし、石作皇子の作戦にも〈虚偽〉はあった。が、その〈虚偽〉は見破られることを前提に持ち出したもので、飽く迄も捨て石の小道具に過ぎなかった。実際に捨てたのが石鉢で、捨て鉢だったというのは、石作皇子が自棄を起こす必然性を暗示していて、今から思えば実に良く出来たオトシ話だったワケだ。となると、この倉持皇子は偽物を小道具にするのではなく、偽物自体で本気で姫を騙そうとするらしいことが、この「たばかり」の語用から予告されているように見える。第三段で「心の支度ある人」を〈機転の利く人〉と言い換えたが、本文にこう書かれているのだから、この「心謀りある人」は最初から〈腹黒い人〉と言って置いて良いのだろう。*「ゆあみ」は「湯浴み」で〈入浴〉だが、此处では長期の〈湯治療〉という口実らしい。

みこいとしのびて、人もあまた、いでおはしまさで（皇子はごく質素にして、従者も多くはお連れなさらずに）、ちかうつかうまつる人どものかぎりして（側近の者たちだけに）、「おはしましぬ」と人にはしらせ見せ給〈ひ〉て（「出帆なさいました」と世間には見せて知らせなさて）、二日ばかりありて、こぎかへり給〈ひ〉ぬ（二日ほどしてから、湊に漕ぎ帰っていらっしやいました）。

かねてこそ、みなおほせられたりければ（事前に段取りは全てお言いつけになっていたの）、その時、ひとりのたからなりける、かちたくみ六人をめしとりて（当代の第一人者の名人である鍛冶職人六人を呼び寄せて）、たはやすく、人よりくまじき家をつくりて（容易には人が寄り付けない家を造って）、かまどを、三へにして、こめて、たくみらをいれ給〈ひ〉つ（竈を三重にして周囲を遮って、匠たちを収容なさいました）。

みこも、おなじ所にかくれみて（皇子も同所に隠れ住んで）、*しらせたまへるかぎり、十二方をふたぎ、かみにくちをあけて、たまのえだをつくり給〈ふ〉（秘密をお知らせになった者だけの十二人に口止めて遣い走り命じ、倉庫番には彼等を出入自由にさせて、ありったけの財宝を注ぎ込んで、玉の枝をお作りになりました）。*「しらせたまへるかぎりじふにかたをふたぎかみにくちをあけて」は「全集」で示されている流布本本文とはだいぶ違う本文だ。そして、「全集」の当該注には〈古来、この物語中で随一の難解箇所とされている。〉とあり、示された本文と訳文は〈仮に示した試解の一つにすぎない。〉と言割がある。丁寧な注釈に感服する。そして注には詳しい語注も示されているが、当古本本文自体が別物なので、此处ではそれらは参照しない。ただ、どうせ定説の無い難文ならと気を大きくして、此处では私にとって分かり易いように、

我流の当て図法で当本文を勝手に言い換えてみる。さて、先ずは「しらす」だが、これは「しる」の未然形「しら」に間接表現または使役の助動詞「す（そのようになさる・させる）」がついた丁寧語・尊敬語ということらしい。で、「しる」だが、ここでは「知る（認識する、理解する、分かる、承知する）」または「領る（治める、統治する、領有する）」の内のいずれかの語意と解されるらしい。私はこの「しらせたまへるかぎり」は<（皇子が秘密を）お知らせになった者に限っての>と読んで置く。「十二方」は<（職人とは別に物資調達で密室に出入りする）従者の十二人>。「ふたぐ」は<口止めする>。「かみ」は「守」で、この文の主語は省かれてはいるが紛れも無く倉護皇子なのだから、その皇子に仕える「守」とは<皇子が倉護する倉庫の管理司>なのだろう。「くちをあく」の解釈について、是はかなり強引だが、元々全部強引なので、いっそ「ふたぐ」に掛けた洒落語用、と見做して<（倉庫の出入自由な）許可者と知らせる>を意味すると共に、大盤振る舞いで<倉庫の口を開ける→ありったけの物資を注ぎ込む>との掛詞語用。以上の語解釈で言い換える。

かぐや姫ののたまふやう、たがはずつくりいでつ（かぐや姫が仰せになった物そっくりに作り出したのです）。かしこくたばかりて、みそかになにはに出くでぬ（外部にバレないように上手くごまかして、その造花を密かに難波湊に持ち出しました）。

「ふねにのりて、かへりにけり」と殿につげやりて（それから、「船に乗って帰り着いた」と自邸に使者から知らせて）、いといたく、くるしがりてみ給へり（皇子ご自身は、それはひどく疲れきった様子をして難波にいらっしゃいました）。むかへに人、おほくまゐりたり（迎えの人は多く参りました）。たまのえだは、なかびつにいれて、物おほいて*もてまゐる（玉の枝は箱に入れて布で覆って都に運んできます）。*「持て参る」は皇子の自邸に運び入れたのかとも思ったが、下文に皇子が「なにはよりは、昨日なむ、都にはまうできつる。さらに、しほにぬれたるきぬをだに、ぬぎかへなでなむ、ここには、まうできつる」と言っているので、此处では<都に>運び込んだと読んで置く。

*いつかききけむ（竹取邸の家人は倉護皇子一行が都に帰り着いた噂を聞きつけ）、「くらもりの御子は、*うどむげのはなもちて、のぼり給へり」とてののしりけり（「倉護皇子は優曇華の花とされる蓬萊の玉の枝を手に入れて帰京なさった」と大騒ぎしました）。これを、かぐや姫きき給くひて（この騒ぎをかぐや姫はお聞きになって）、「我はこのみこにまけぬべし」とむねつぶれておもひをり（「私はこの皇子との勝負に負けてしまいそうだ」と動揺していました）。

*「いつか聞きけむ」の主語は誰か。分かり難いが、文意からしてこの「ののしる」は<罵倒する>ではなく<椿事に大勢

が騒ぎ立てる> だろうから、この文の主語は<複数の人びと>ではあるらしい。そして、その騒ぎを「かぐや姫聞き給ひて」と続くことから、此処の文意は、都に戻った倉護皇子一行の噂を聞きつけた<竹取邸の家人>が、皇子が玉の枝を持ち帰って来たらしいと確かめた、とのように読むのが、最も不自然さが少ないように思われる。*「うどんげ」は大辞林に<仏教では三千年に一度花が咲くといわれ、花の咲く時は金輪王（こんりんおう）が出現するとも、また、如来が世に現れるとも伝えられる。>とある。さっぱり分からないが、仏門に於いては<尊い稀花>とされているものらしい。しかし、かぐや姫が倉護皇子に注文したのは<蓬萊の玉の枝>であって「うどむげのはな」ではなかったため、是は如何にも唐突な発言であるかの印象を受ける。この点について「全集」の注には<『今昔物語集』巻三十一の竹取翁説話において、三人の求婚者の一人に示される難題がこの優曇華の花であることは注意を要する。古い形の竹取物語の一部が痕跡をとどめているとも考えられよう。>とある。そうなのかもしれないが、この点に付いても、この物語が仏心に篤い国情の時代の中で語り継がれてきた、と仮定すれば、かつての多くの読者にとって<蓬萊の玉の枝 = 優曇華の花>というのは、何も唐突な物言いではなかった、ようにも推量されてくる。この仮説は相当に確からしく思うものの、全く論証出来ていないが、左様に補語して置く。

かかるほどに、かどをたたきて、「くらもりのみこ、おはしたり」とつぐ（そうしているところに、皇子の従者が竹取邸の門を叩いて、「倉護皇子がお越しです」と告げます）。「たびの御すがたながら、おはしましたり」といへば、翁あひたてまつる（応対に出た家人が、「皇子が旅のお姿のままでお見えになりました」と云うので、養父がお会い申し上げます）。

みこのたまはく（皇子の仰せに）、「いのちをすてなむ、かのたまのえだとりて、まうできたる（命懸けで御所望の玉の枝を持って参上しました）。かくやひめに、とくみせたてまつり給へ（かぐや姫に篤とご覧に入れてください）」といへば、翁、もて入くりぬ（というので、養父はその玉の枝を持ってかぐや姫の部屋に入りました）。

このたまのえだにふみぞついたりける（この玉の枝には手紙が添えられていました）。

（和歌 04）「いたづらに 身はなしつとも たまのえに たをらでさらに かへらましやは」

（和歌 04、「全集」流布本版）「*徒に身は成しつとも玉の枝を、手折らでさらに帰らざらまし」 *当古本文との違いは、三節が「たまのえに」と「たまのえを」、五節が「帰らましやは（帰ることがあったでしょう）」と「帰らざらまし（帰らなかったでしょう）」になっている。少しの違いだが、両句の印象は幾分と違う。とはいえ、当然ながら詠み筋は共通していて、「いたづらに」が<むなく・無駄に>という副詞語用で結句に掛かると共に、「いた

づらになす」が<死なせる>という言い方で、それが「身を（自分を）」とあるので、上文の「いのちをすててなむ」を前フリとした<死んでしまう>という意味の条件項提示として重複語用されている、ということが工夫なのだろう。ただ、「たまのえ」を<玉の枝>と<偶の縁（得）>の掛詞にするなら、格助詞は「を」よりは「に」の方が洒落ている。何れにしても、この歌の力点は「たをらでさらに」にありそうで、それが<姫を抱かずに>に聞こえるように詠んだことが倉護皇子の面目躍如たる所以なのだろう。

（換歌 04）「死んだってめぐり会わずに 帰らない」

これをも、あはれとも見でをるに（姫が皇子の贈歌のこの「手折らでさらに帰らまし」とある句が<抱かぬ内は帰らない>という言い寄りなのだ、おぞましく思っていると）、竹取の翁、（はしいり）ていはく（竹取一族の長である養父が非常に上気して云うことには）、*「これをも」の「これ」とは何か。皇子の歌ではあるのだろうが、歌全体のことではないだろう。というのは、「をも」の「も」は「これ」を話題の対象に規定する格助詞「を」を強調する係助詞で、「これをも」は<このことこそを>という言い方だから、それは<皇子の贈歌の中でも特にこの部分を>という意味になるからだ。で、その「この部分」とは何処か。述語は「あはれともみでをる（感心しないで居る）」とあるので、やはり「たをらでさらにかえらまし（抱かずに決して帰らない）」という肉薄にゾツとした、ということなのだろう。*「はす」は<急ぐ、慌てる、興奮する>かと思う。校訂では「はしいて」を「馳し入（り）て」と解してあるようだが、「はしい」の「い」は強調の接尾語と読んで置く。

「みこに申くす」給くひし、ほうらいのたまのえだを、ひとつの所あやまたず、もちておはしませり（あなたが見たいと皇子に申し上げなされた蓬萊の玉の枝を、皇子は一点の違いなく持っていらっしやいました）。なにをもちてか、さらにとかく申くすべき（この上は、何を以って文句の付け様がありましょう）。たびの御すがたながら、我くが家へも、より給はずして、おはしたり（皇子は旅のお姿のまま、ご自宅にもお寄りなさらずに、此処にいらっしやったのです）。はや、みこにあひつかうまつれ（早く皇子に嫁いでお仕え申しなさい）」といふに（と言うので）、物もいはで、つらつへをつきて、いみじう、なげかしげにおもひたり（姫は答える言葉も無く、頬杖をついて非常に無念そうに困っていました）。

このみこ、「いまさへなにとの給くふ」べきならず」といふままに（この倉護皇子は、「この上はもう言い逃れ出来ますまい」と言いながら）、縁にはいのぼり給くひぬ（縁側に這い上っていら

っしまいました)。

翁 (養父は皇子のこの性急な押し出しにも)、「*ことほりにおもふ (尤もに思います)。
このくにに、見えぬさまなる、たまのえだなり (この国では見たこともない玉の枝です)。このた
びは、いかでか、いなび申さむ (今回はどうしてお断り申せましょう)。人さまもよき人におはす
(皇子はご立派に見えるお方です)」などいひゐたり (などと姫に言って座していました)。

*「ことほりにおもふ」は、「全集」注が是をく地の文と考える説もあるが、従えない。>としてある。しかし注には仔細解
説は無いので、私なりにワケを考えてみる。で、仮に是を地文として読んでみるとく養父は皇子の侵入も当然の権利
に思います>あたりとなって、是は現代語文としては然して変ではないのかもしれないが、この語り手目線による内心断
定の言い方は、古文らしくない。という感想に過ぎないが、ざっと、地文は外形表現で事態の客観的推移を説明する
のは基本的な機能だろうし、誰かの内心を述べるにしても、その感情を言うことで、実は其処にそういう気持の人がいる
という客観情勢を説明するもので、この場合でも「ことほりにおもふ」人が居るなら、「ことほりにおもひたり」くらいの言い
方になるような気がする。といっても、私にはこれ以上の厳密な分析は出来ないが、是を地文として読む不自然さ
は、どうも気持ち悪さを禁じ得ないので、「全集」注に従って、是を翁の発言文として括弧内に移して読んで置く。

かぐや姫の*いふやう (かぐや姫の内心で云うには)、「おやののたまふ事を、ひたぶるに、い
なと申さむことのいとをしさになり (親が仰る結婚の勧めを無闇に拒み申すのに気が引けたか
らだったのに)。かたき物をかくあさましく、もてきたることを (得難いものをこうも容易に持って
来たとは)」ねたくおもふ (と心外に思います) *「いふやう」はく言い分>だから普通は発言内容にな
るかと思うが、もし発言であるなら、その会話の相手は翁であるはずで、姫のこの皇子を嫌がる言い方の聞き手である
翁が、下文で「ねやのなかをしつらいなどす」るのでは、会話が成立しておらず場面が繋がらない。なので私は、「ねたく
おもふ」を発言文括弧から外して地文と見て、全体の文意を姫の内心での言葉として読んで置く。このあたりの地文と
発言文との括弧校訂は文意を相当に左右するようにも見えるが、こういうグニャグニャの状態で伝えられてきた口承文
は実に難物ではあっても、なんだかナマモノっぽい感触がある。いや、私は然して楽しめていないが。

翁は、ねやの中を、しつらいなどす (養父は、結婚が決まったものと思い、寝屋の中を、皇
子を迎えるべく、男物の道具類などを用意して整えます)。

翁、みこに申くすやう (それから養父が皇子に申すには)、「いかなる所にか、この木はさ
ぶらひけむ (どういう所にこの木はあったのですか)。あやしうるはしく、めでたき物にこそ (不

思議な程に美しく、素晴らしいものですね」と申くす（と申します）。

みこ、こたへてのたまはく（皇子は答えて仰います）、「*さいととしの（きさらぎの）十日ころより（三年前の二月の中旬に）、なにはよりふねにのりて、うみの中にいでて（難波湊から船に乗って海の中に出帆し）、いかむかたもしらず、おぼえしかども（目的地も分からず、不安だったが）、*「さいととし」は「さきをとし」の音便らしい。「全集」本文には「さをとし」とあり「一昨昨年」と漢字表記がある。三年前の話となって、詰まりは、かぐや姫から出題されてから今が三年後ということになり、石作皇子の回答時期に近く、石作皇子に続いて帰京したような段取りにも見受けられるが、皇子同士の兼ね合いは全く語られること無く、それぞれ独立した話の体裁で語られているようだ。また、この古本本文では「きさらぎの」という文は欠落していて、校訂者が補訂したらしいが、月が示されないままに日が示されるのは確かに変だ。が、「きさらぎ（二月）」と特定できる根拠はどこにあるのか。後文に示されているのかも知れない。なお、流布本本文には「きさらぎの」と明示されているようなので、其方を参照して引いたのかもしれない。ただ、釈然としないのは、今現在は何月なのか、そも、かぐや姫を見つけたのは何月だったのか、など、言い出せば不明な事だらけで、むしろ偶に具体的な数字が出ると、当時の読者には常識の史実が下敷きされた暗黙了解の物言いのように聞こえて、私は部外者たることを念押しされたかの疎外感を覚える。

おもふことならで、世中にいきて*かいなし（目的が果たせないでは、この世に生きていても意味が無いので）、かぜにまかせてありく（風に任せて、玉の枝を探し続けて、歩きます）。いのちしなばいか~~が~~せむ（命が尽きれば仕方が無いが）、いきてあらむかぎり、かくありきて（生きている限りはと、歩き続けて）、『ほうらいといふなる、山はありや（蓬莱という山は何処にあるのか）』とうみにうきた~~だ~~よひありく（と海に浮かび漂い歩きます）。*「かひなし（無駄だ、意味が無い）」の形容詞終止形は、此处が言い切りの文末ではなく、理由提示項語用で下文に続く文法、と読んで置く。

我くにのうちははなれて、まかりありきしに（我が国の領海を離れて進んで行きますと）、*あるときには、なみあれつつ、うみのそこにいりぬべく（ある時は波が荒れて海の底に沈みかけ）、ある時は風につきて、しらぬくににふきよせられて、おにのやうなる物いできて、ころさむとしき（ある時は風向きのままに、知らぬ国に吹き寄せられて、鬼のような化物が出て来て、私を殺そうとしました）。*「あるときには」は普通は＜例えば一部の場面に於いては＞という言い方が多いのかも

しれないが、此処ではこの「あるときには」や「ある時は」が何度も続く上に、似たような事例が繰り返し語られる。皇子が作り話に窮した、というのは、「たばかりあるひと」らしくない。どうやら、此処で言う「ある時は」は、その時間経過が特定できないので使った曖昧表現で、意味合いとしては<その後では>と出来事の順を追って苦労話を語った、というこ
とらしい。

ある時には、きしかた行さきも見えぬうみにまきいれむとしき（ある時は大海に方向を失い
迷い掛けました）。あるときには、かてつきて、くさ木のねをくひものにはしき（ある時には食料
が尽きて、無人島の草木の根を食い物にしました）。

ある時には、いはむかたなく、むくつけげなる物いてきて、くひかからむとしき（ある時には言い
ようも無く気味悪い化物が出て来て、私を食い掛かろうとしました）。あるときには、うみのか
いをとりにて、いのちをつぐ（ある時には海の貝を採って命を繋ぎました）。

ある時には、さるたびのそらに、たすけ給くふべき人もなき所に、いろいろのやまひをして、ゆ
くかたそらもおほえず（ある時には、そうした旅の空に助けてくださる人もいない所で、色々な
病気に罹って、行く先がさっぱり分からなくなり）、かへらむ所、いつかたおほえず（帰る所も、
どこなのか分からなくなりました）。

ふねのゆくにまかせて、うみにただよひ（船が進むのに任せて海に漂い）、五百日といふ、た
つときばかりに（五百日目の午前八時くらいに）、うみの中に、わづかに山みゆ（海上に
わずかに山が見えました）。*ふねのうちをなむ、せめて見る（私は船の内縁いっぱいから、
山の方に海に身を乗り出して見ます）。*「ふねのうちをなむせめてみる」は分かり難い。この部分、「全
集」も独自の解釈を展開しているようだが、その説も私には分かり難かった。で、いっそ私は我流で、「船の内」を<船の
内縁>、「迫む」を<近づく→山の方に身を乗り出す>、として読んで置く。

うみのうへにただよへる山、いとおほきにてあり（近づく、その海の上に漂っていた山は、とて
も大きなものでした）。その山のさま、たかくうるはし（山の姿は高く美しい）。

『これや、もとむる山ならむ』とおもひて（「是が探していた山に違いない」と思って）、さすが
に、おそろしくおぼえて（そうなりと、非常に緊張を覚えて）、山のめぐりをさしめぐらかして、三

日ばかり、見ありくに（山の周囲を棹を挿して船を漕ぎ回り、3日ほど様子を見ていると）、天のよそほひしたる山女、やま中よりいできて、しろかねのかなまりをもちて、水をくみありく（天女の衣を着た山女が山中から出て来て、銀の杯を持って、水を汲んで歩きます）。

これを見て、ふねよりおりて（是を見て船から降りて）、『この山の名をば、なにと申くすぞ』と*とふ（『この山の名は何と申すのですか』と問うと）、女、こたへていはく（その女が答えて言うことに）、『これは、ほうらいの山なり』と*いふ（『これは蓬莱の山です』と言いますので）、これをきくに、うれしき事かぎりなし（これを聞いて、ついに目的地に達したかと、嬉しいこと限りありません）。*「とふ」の終止形は条件項提示語法で、此处では句点ではなく読点で下に続く、という文型に見做したい。というのは、同文型が此处の一連の言い方になっている、とすれば、特に次の一文の文意が取り易くなるからだ。*「いふ」の終止形も、上の「とふ」と同様に条件提示項と読んで置く。

この女、『かくの給ふは、たれぞ』と*とふ（この女は、私が『そうお答えくださるあなたは誰ですか』と問うと）、『*わか名はこらんなり』といひて、やまのなかにいりぬ（『私の名前はキコリです』と言って、山の中に入って行きました）。その山をみるに、さらにのぼるべきやうなし（その山を見てみれば、険しくて、全く登れるようではありません）。*「とふ」の終止形は条件項提示語法。*「わかなはこらんなり」は「これはほうらいのやまなり（是は蓬莱の山なり）」という言い方に倣って＜我が名はコランなり＞という文型と見做したい。と言っても、「コラン」は不明語だ。また、流布本では此处の文は「わがなほうかんるり」とあるらしく、其方の文意も不明だという。で、どうせ定説が無いなら、これも我流で遣っ付けてみたい。文脈から可能性を探れば、「樵る（こる、木を伐る）」の未然形「こら」+意志の助動詞「む」がついた「こらむ（木を伐ろう→木樵り）」の音便あたりが思い付く。

そのやまの、*そばひらを見あぐれば（その山の崖を見上げれば）、世〈の〉中になき、はなの木どもあり（世の中には無い花の木々がありました）。こがね、しろがねのみず、山よりながれいでたり（黄金や白金の水が山から流れ出していました）。それには、いろいろのたまのはしわたせる（その川には色々な宝石で橋が渡してありました）。*「そばひら」は古語辞典に＜険しい斜面。がけの側面。＞とある。ソバ立つ辺り、みたいな言い方らしい。

そのあたりに、てりか~~が~~やく木どもたてり（その辺に、照り輝く木々が生えていました）。その

中に、このとりてまうできたるは、いとわろかりしかども（その中では、此処に採って持って来た枝は、とても見劣りするものでしたが）、のたまひしにたがはず（姫の仰せの形に違いないので）、このはなをおりて、まうできたるなり（この花を手折って、参上したのです）。

山はかぎりなくおもしろく、世にたとふべきにあらざりしかど（山は何処までも美しく、この世のものに例えようもありませんでしたが）、このえだをおりてしかば、さらに、なにのこころもなく（この枝を折り取った以上は、もう何も興味が無くて）、ふねにのりて、おひかせふきて、四百よ日になむ、まうできにし（船に乗ると、追い風が吹いて、四百日余りで、帰って参ったのです）。大願の力にやありけむ（大願を掛けて祀った神の力のお陰があったからでしょうか）、なににはにふきよせられて侍くりし（いつしか、難波に吹き寄せられていたのです）。

なにはよりは、昨日なむ、都にはまうできつる（難波からは、この昨日、京都に着きました）。さらに、しほにぬれたるきぬをだに、ぬぎかへなでなむ（一切、船旅で塩に濡れた衣さえ、脱ぎ換えて休むこと無く）、ここには、まうできつる（此方に参上致しました）」とのたまふを（と皇子が仰るので）、この翁ききてうちなきてよむ、そのうたは（この養父の親仁は、その苦勞話を聞いて、思わず泣いて一句詠みます。その歌は）、

（和歌 05）「くれ竹の よよの竹取 野山にも さやはわびしき ふしをのみみし」

（和歌 05、「全集」流布本版）「*呉竹の節々の竹取、野山にも然やは侘しき節をのみ見し」 *古本と流布本は同文。「くれたけ」は<中国伝来の竹>ということらしいが、此処では特にその由来や種類は意味せず、縁語の「節」を言い出す枕詞のようだ。が、当然にこの歌筋は、翁が竹取業であってこそその説得力だ。「節」は<ふし>とも<よ>ともいう。「よよ」は「節々（折々）」と「代々」の掛詞。「さやは」は<そうは～しない>という反語表現。

（換歌 05）「竹取に 節々痛む お骨折り」

これを御子ききて（これを皇子は聞いて）、「ここらの日ごろ、おもひわび侍りつる心ちは、けふなむ、おちぬぬる」との給くひて（「長い間、辛く思っていた気持は、今日になって、落ち

着きました」と仰って)

(和歌 06) 「我たもと けふか**は**ければ わびしさの ちぐさのかずも わすられぬべし」

(和歌 06、「全集」流布本版) 「*我が袂今日乾ければ、侘しさの千種の数も忘れぬべし」 *古本と流布本は同文。

(換歌 06) 「衿届き 苦勞の丈も 報われる」

ときこゆるほどに (と返歌を朗詠している時に) 、*おとこども、六人つらねて、にはかにいできたり (得体の知れない男たちが六人連れ立って突如現れました) 。ひとりのおのこ、ふみばさみに、文をはさみて申くす (そして、その中の一人の下男が、文挟みの竹枝に、手紙を挟み掲げて申します) 、 *「おとこども」について、「全集」は本文を「をのこども」と示し、注に<「をとこ」ではなく「をのこ」であるのに注意。「をのこ」は「仕えている男」の意。>とある。大体に於いて片桐氏は、古本は誤りが多い、とし、依って流布本を「全集」本文に録つたらしいが、私は折角この古本文を読んでいるので、できるだけ当本文の言い換えに努めてみたい。で、此処の場合でも、差し当たっては「にはかにいできた」者どもなので、正体がよく分からず、取り敢えず認識できた<男性属性>を以て語っている、と言えなくもない、として置く。で、次の文ではその男たちの風体も分かってきたので、「おのこ (をのこ、下男・奉公人・下位の男) 」と言っている、のだろう。

「*つくも所のたくみ、*あやむべのうち申さく (作物所の細工師の、アイヤハア、宇部の宇治が申し上げますに) 、たまのえだを、つくりつかふまつりし事 (玉の枝を造る任に当たりました事で) 、*五こくをたちて、千よ日に、ちからをつくしたること、すくなからず (素食に甘んじ精神集中して製作に打ち込み、一千日余りに渡って、尽力したこと、少なくとも) 、しかるに、ろくいまだ給はらず (しかしながら、俸禄をいまだ頂いていません) 。これを給くひて、われらが*けごに給はせむ (これを賜って、我が妻子に与えたいのです) 」といひて、ささげたり (と言って文挟みを差し出しました) 。 *「つくもどころ」は古語辞典に<「作物所」。「つくりものどころ」の約。蔵人所 (くろうどころ、帝の秘書室) の所管で、宮中の諸調度を調達する所。>とある。「全集」注によると、この文の解釈にも諸説あるようだが、取り敢えずは当本文を真じて読んで置く。 *「あやむべのうち」はこの直訴者の名前らしい。「全集」の本文は「あやべのうちまる」とあって、なるほど人の名前然としているが、「あやむべのうち」は誤写だろうか。そうかもしれないが、一応は是を真じて、勝手な押し付けを試みれば、「あや」は<あのう、そのう>みたいな下男らしい言

い淀みで、「むべのうち」は<宇部の宇治>というトボケた名前だと面白い。*「五穀を断つ」は<飽食を貪らない→素食に堪えて精進する>だろうか。*「けご」は「家子」で<妻子・召使・弟子など。>と古語辞典にある。

竹取の翁、「このたくみらが申くす」事は、なにことぞ」と、あやしがりてかたぶきをり（竹取の養父は、「この職人たちが申すことは、何の事なのだろう」と、不審がって首を傾げています）。みこは、われにもあらぬ心ちして、きもきえぬたまへり（皇子は、動転して平静を保てず、肝を潰していらっしゃいました）。

これがかぐや姫ききて（この騒動をかぐや姫は聞いて）、「かのたてまつる文とれ」といひて見れば（「その職人が差し出している手紙を持って来なさい」と侍女に言って、侍女がその手紙を読んで）、文に申くしけるやう（文面にある申し分には）、

「御子の君、千日、いやしきたくみら、もろともに、おなじ所に、かくれみ給くひて（皇子の君は千日間、身分の低い細工師たちと一緒に、同じ家に隠れ住んでいらっしゃって）、かきこきたまの木を、つくらせ給ふとて（立派な宝石の木を造らせなさるということで）、『つかさも給はむ』とおほせ給くひき（『褒美に官位も与えよう』と仰せになりました）。

それを、このころ*あむずるに（この褒美の事を、今考えてみますに）、『*御使つかみおはしますべきかぐや姫の*えうじ給ふきなりけり』とうけ給はりて（「お造り申した玉の枝は、御側室でいらっしゃるそうなかぐや姫が御所望なされたものなのだ」と聞き知り申しまして）、『この*宮より給はらむ』とて、まいれるなり（こちらの御屋敷から褒美を賜ろうということで、やって参りました）」といふをききて（とあるというのを聞いて）、*「あむず」は「案ず（あんず、考える）」の換字らしい。*「御使」は「おおんし」ではなく「おおんつかひ」と読むのだろうか。「使」のあとに「つかみ」と書かれているが、「使」が赤字になっているのは、「つかみ」が「つかひ」の誤字だと示しているのだろうか。分かり難いが、一応左様に解して置く。で、「つかひ」だが、これは貴人の代理を努める<使者>ではなく、貴人に<仕ふ召人=妾>のことをいう、らしい。「全集」注にも、この「つかひ」については<使い人。召人。北の方ではなく身の回りの世話をする一段下の待遇の妻。かぐや姫は皇子の正室となる身分ではなかったのである。>としてある。いや、このことは、当時の身分社会の実態を「源氏物語」で覗き見れば、最初から抱く大きな疑問の一つではある。いくら財宝を掘り当てて、俄長者になったところで、官位もない竹取業の家に王家の御子や政府高官が「妻問ひ」をすること自体が有り得ない設定に見える。せいぜ

いが遊び女で、不遜な態度で貴人に従わなければ家ごと取り潰される。それが、秩序の維持であり、日常の安定性を実現する処置のはずだ。とか言う理屈には目を瞑って、話の展開を楽しもうとしているというのに、此処でそういう問題意識を呼び覚まされると、なんだかザラつく感触を覚える。が、だからそれだけに、この物語の初期構想とその後の脚色講談とは、どこかで見比べたい気持ちにもさせられるので、此処もその手掛かりの重要な箇所ではありそうだが、今はただ語意を拾って読み進める。*「えうず」は「要ず」という他動詞で〈必要とする。求める。〉と古語辞典にある。*「宮」について、「全集」注はく竹取の翁の邸を、宮と称しているのに注意。ほんらいは、御屋とすべき。りっぱな建物の意であるからか。〉としてある。ということは、古本も流布本も此処では「宮」の漢字表記になっている、ということらしい。私も違和感を覚えるが、かぐや姫を「御使」と思っている職人から見れば、王子が側室を住まわせている御殿はく御屋＝宮〉なのかも知れない。ただ、かぐや姫が皇子の「御使」になっているとは思わない読者に、分かり易いのはく御屋敷〉という言い方だろうか。

かぐや姫の、*くるるままに、おもひわびつる心に、わらひさかへて（かぐや姫の、日が暮れるに従って床入りが迫り、落ち込んで困り果てる心に、一気に満開の花が咲いて）、翁をよびとりて、いふやう（養父を呼び寄せて、言うには）、*「くる」は「暮る」で〈日が暮れる〉であると共に、「暗る」で〈暗くなる、落ち込む〉でもある。

「まことのほうらいの木とこそおもひつれ（本当の蓬莱の木と聞いていましたが）、かくあさましき、そらごとにてありければ、はや返し給へ（このように呆れた偽物だったので、すぐに返してください）」といへば、翁こたふ（たとえば、養父は答えて）、「さだかにつくらせたる物ときくきつれ」（確かに造り物となれば）、かへさむこと、いと*やすし（返すのが、ごく当然だ）」とうなづきをり（と頷いていました）。*「やすし」は「易し（容易い、簡単だ）」ではなく「安し（平穏だ、順当だ）」と取って置く。

かぐや姫の、心ゆきはてて、ありつるうた、返くし（かぐや姫はすっかり安堵して、先ほどの皇子の歌に返歌して）

（和歌 07）「まことかと ききて見つれば ことの葉を かざれるたまの 枝にぞありける」

（和歌 07、「全集」流布本版）「*真かと聞きて見つれば、言の葉を飾れる玉の枝にぞありける」*古本と流布本は同文。「全集」訳文にはくまことの「こがねの葉」かと聞いて、見てみれば、是は「ことの葉」を飾った偽りの玉の枝でした〉のようにある。

(換歌 07) 「言の葉で 飾る落ち葉の 玉の枝」

といひて、たまのえだかへしつ (と書き添えて、玉の枝を返しました) 。竹取の翁は、さばかりかたらひつるうへ、*かすかにおぼえてねぶりをり (竹取の親仁はだいぶ皇子と親しく話し込んだ事情に、身が縮む思いがして、目を瞑って眠ったふりをしていました) 。 *「かすか」は<少ないさま、小さいさま>なので、此处では<身が縮むさま>と読んで置く。

みこは、たつもはした、ゐるもはしたにおぼえてみ給へり (皇子は立つのもきまり悪く、座るのもきまり悪く覚えているらしい) 。日のくれぬれば、すべりいで給くりぬ (日が暮れたので、夜陰に紛れて滑るように音も立てず、竹取邸を脱け出しました) 。

かのうれへせしたくみを (その愁訴してきた細工師たちを) 、かぐや姫、よびすへて (かぐや姫は呼んで、階下に控えさせて) 、「うれしき人どもなり」といひて、ろく*いとほしくとらせ給くふ (「歓迎すべき人たちです」と言って、褒美をとともたくさん与えなさいます) 。 *「いとほしく」が、形容詞「いとほし (可哀相だ。気の毒だ。不憫だ。懸念だ。愛しい。可愛い。)」の連用形なら、他動詞「取らす (与える)」の修辭となる構文だが、この形容詞は「思ふ」などの抽象作用動詞に掛からないと文意が成立しない。この部分は「南波校本」には「いとほく (多く)」とあるので、此方に従う。

たくみら、いみじくよろこびて (細工師たちが非常に喜んで) 、「おもひつるやうにもあるかな」といひて、かへるみちにて (「期待通りの成果だった」と言って、帰る道で) 、くらもりのみこ、ちのながるるまで、*ととのへをさせ給くふ (倉護皇子は血の流れるまで懲罰を加えさせなさいます) 。ろくえしかひもなくてければ (細工師たちは報奨を得た喜びも台無しになり) 、みなみな、とりすて給くひてければ、にげまどひにけり (皇子が褒美の品々をすべて取り上げて捨てなさいましたので、逃げ惑ったのです) 。 *「ととのへをさす」は分かり難い。「全集」文とは違うので誤写かもしれないが、当本文を真じて読解を試みる。で、「ととのへ」を八行下二段活用の他動詞「整ふ」の連用名詞 (当該作用自体の名詞化) と見做せば、「整へ」は<整えること。揃えること。準備すること。>あたりだが、「整然とさせる」を皇子の立場で拡大解釈すれば<正しい形に直す→懲罰を与えて矯正する>という線が見えてくる。

かくて、このみこは (こうして、この倉護皇子は) 、「いささのはぢ、これにまさるはあらじ (他

の小さな恥は、是に勝ることはない）。女えずなりぬるのみにあらず（女を自分のものに出来なかつたばかりか）、天下の人の、*見おもはむ事ぞはづかしき事（国中の人が、我を偽物で女を釣り損なつた情けない男と、判じ思うであろうことが恥ずかしいことだ）」との給〈ひ〉て、ただひとところ、ふかき*山へいり給〈ひ〉ぬ（と仰って、一人きりで、剃髪入信し、深い山へお入りになりました）。*「見思はむこと」はその具体内容や形容修辭が無い。が、此処の内容は以下の文を読む上で鍵になりそうなので、私なりに話に沿ってまとめて置く。*「やまへいる」は「全集」注にもく山寺に入ったということであろう>としてあるが、むしろそれ以外の意味は無いと思うので、左様明示補語する。また、「全集」が指摘するく「山中をさまよつた」というのも勝手な想像である。>には全面的に賛同する。

宮づかさ、さぶらふ人々は、みなてをわかちて、もとめたてまつれど、え見つけたてまつらずなりぬ（宮家の役人や奉公人たちは皆手分けして皇子を探し申し上げたが、見付け出し申せませんでした）。みこの*御もとにては（一方の、皇子ご自身が隠れ住む山寺に於いては）、『*かくしはてむ』とて（隠し切つたということで）、としごろは、『*たまさかなる』とは、いひはじめける（この年来は、皇子が玉の枝の引き合わせで僅かな間だけ姿を表したように、稀に起こることを「たまさかだ」とは、言い出したのです）。*「おおんもと」は分かり難いが、「にては」という対比を示す助詞語用があることから、上文の「見つけ奉らずなりぬ」<宮家事情>に対して<一方のご自身が住まうところ＝山寺>を指す言い方、と取って置く。また、当文については此処の箇所を初め、多くの語や語用が「全集」などの流布本と違って、当然に文意も異なるが、その上で尚、他書を参考にしたい。*「隠し果つ」はく隠し切る>なのだろう。当本文には「かくしはてむ」と未来意志の文意になっていて、「む」は赤字なので校訂者の改訂らしいが、別字や別解釈の可能性はないのだろうか。で、仮に「おおんもとにては」が「え見つけ奉らずなりぬ」に対する他方事情を語っているなら、此処の文意も事態の結果状態を示すので、末尾の助動詞は未来推意の「む」ではなく、過去認識の<り>や<つ>を当てるべきもの、と独断して置く。*「たまさかなる」は「たまさか（滅多にないことだ。偶然だ。稀だ。）」という形容動詞の連体形なので、他本本文にあるらしい「たまさかる（魂離る、魂が抜ける・呆然とする）」との混同語用を検討する煩わしさは避けられる。それでも、一切姿を見せないのと、偶に姿を見せるのとでは大違いで、皇子は今や世間から完全に姿を消しているようなので、とても「たまさかなる」状態とは言えないだろう。では、この「たまさかなる」の対象体言は何か。いや、やはり倉護皇子なのだろう。皇子は確かに、今は姿を消している。が、その前にも三年間と倉に籠もつて姿を消していた。そして、やっと姿を見せたと思ったら、また姿をくらました。もしかして、「くらもり」命名の本義は「倉護（倉をマモル）」ではなく、「倉籠（倉にコモリ）」なのかもしれないし、「蔵増（姿をクラマセ

り) 」だったのかもしれない。だから、姿を見せた時が「たまさかなる」状態だったのであり、それは「玉の枝（偶の縁）」の引き合わせだった、というダジャレのオチなのだろう。このバカバカしさが万人に受けて、この物語が長く語り継がれた一つの要因になった、というのは言い過ぎか。